渋沢栄一の生き方

1　商売への目覚め

渋沢栄一は、江戸時代末期の天保 11 年（1840 年）、現在の埼玉県深谷市血洗島の農家に生まれました。栄一の家は田畑の耕作ばかりでなく、絹の材料をとる養蚕業や布などに紺色の着色をする染料である藍玉の生産と販売も行う裕福な農家でした。父親からは漢学を学ぶとともに律義さと人への思いやりを、母親からは慈悲の心を学びました。母（えい）は、大変慈悲深い人で、病弱な人に着物を施し、食事の世話までしました。

そして栄一は誰よりも熱心に学問や読書、書道に取り組みました。当時の学問は、「論語」をはじめ中国から日本に渡ってきた「四書五経」と言われている儒教を学ぶことでした。さらに剣術にも熱心に励み、神道無念流を学び、剣術修行に出かけることもありました。

栄一は、14 歳ごろになると家業を手伝い始めます。それまで、藍葉の買い付けは父などに同行して学んでいましたが、父に頼み 1 人で買い付けに行くことにしました。最初は相手にしなかった農家の人たちも、子どもながらに「この葉は肥料が足りない。これは乾燥が不十分」等と話す鑑識眼の優れた栄一に驚きました。栄一のことはすぐに評判になり、ある村では全ての農家の藍葉を買い付けるほどでした。

栄一は家業を手伝う中で、商売をすることへの魅力に目覚めたのです。

栄一の生誕の地深谷市の旧渋沢邸「中の家」（渋沢栄一記念館所蔵）

藍玉（渋沢栄一記念館所蔵）

2　尊皇攘夷思想に影響を受け、高崎城乗っ取り計画

栄一は、従兄弟の尾高惇忠の家に 7 歳の時から通い、論語をはじめ多くの学問を学ぶとともに、尊王攘夷思想の影響を受けました。

当時、幕府の御用金調達と称して、領主が富裕な領民に金を供出させることがたびたび行われていました。栄一が 17 歳の時、裕福な農家であった渋沢家は、血洗島の領主から 500 両の御用金を差し出すよう申し渡されました。父親の代わりとして岡部藩の陣屋に出頭した栄一は、役人の傲慢な態度に正論で対抗しました。この時のやりとりから生まれた「侍が威張るのは、結局は幕府の政治が悪いからだ」という反発心が、栄一を「倒幕」の思いにかりたてていったのです。

その後、尊王攘夷運動に深く共鳴していった栄一は、21 歳の年に初めて江戸に出ました。儒学者・海保漁村の塾生となり、剣術の達人・千葉周作の道場にも出入りして剣術にも磨きをかけていきました。やがて栄一が 24 歳の時に、いとこの尾高惇忠、惇忠の弟である長七郎、いとこの渋沢喜作らとともに、高崎城を乗っ取り、横浜の異人館を焼き討ちするという一大攘夷計画を立て準備をはじめました。しかし、長七郎が京都での見聞からこの計画に反対し、結局計画は中止となりました。

倒幕の計画を企てたことが世に知れ、栄一は喜作とともに京都に逃れました。無事京都に逃がれたものの、やがて持ち金も尽き、さらに同志だった長七郎が江戸で捕われの身となったと知らせが届きました。

埼玉県深谷市の渋沢栄一記念館様から貴重な写真のご提供をいただきました。誠にありがとうございました。記して感謝申しあげます。

尾高惇忠生家と肖像画　（渋沢栄一記念館所蔵）